



書評

「気象辞典」和達清夫・福井英一郎・島山久尙監修

A 5—408 頁, 1200 円, 54 年 1 月, 天然社

「気象の事典」和達清夫監修

A 5—700 頁, 980 円, 54 年 3 月, 東京堂

ほとんど日と同じくして気象学の辞典が二冊, それぞれ別の書店から出版された。

気象学の辞典類に関しては米国の気象局で出しているグロッサリーやリンケの Meteorologische Taschenbuch などはこの方面の先輩といえよう。又我が気象界でも, 気象学用語集があつていろいろ役にたつていた。ところが欧文では手軽に使えず, 又用語集では言葉に説明がないのでなんとか手ごろな辞典類がほしいものなどの要望が所々で起きていた。これは心おぼえとして索引する専門家にとつても, またいく冊も気象の本を手もとに揃えておくことが実際には困難な専門以外の人にとつてもこのようなものを要望する程度は同じであつたらう。その意味ではこの出版企画は適切であつたかもしれない。ただ同じ監修者による同じジテンが同じ時期に出たのではちよつと読者はどつちを買つたらいいかとまどいさせられてしまう。書評子はどつちのチョウチンも持ちたくないで極めてあたりさわりのないことでお茶をにごそう。

「辞典」の方は cyclopedia とらたつているだけにとにかく語いは棒組でぎつしりとつまつている。とくに農業, 水産業関係や気候に関する語いが豊富で, ときにはこれは農学辞典ではないかと思うことがあるくらいで, そうした意味では農業気象関係者は特にちよろほうするであらう。「事典」の方は語い少ないがそれだけに各項目についての説明がゆつたりとしている。大項目, 小項目とバランスがとれているので, その点使い易い。とくに面白いのは執筆者の名を各項目ごとに付してあるので誰がやつつ仕事をして, 誰がまじめに書いているかがよく表われていることである。

両ジテン共いろいろの点で競争しているように感ぜられるが, ミスプリの方も競争しているのではなからうか, 表紙あけて一番「辞典」では「高積雲」が地上にはつていたり, 事典では昭和 29 年 9 月 21 日に起つた龍巻の写眞が載っているなどなかなか愛きようがある。

「事典」で気になるのは英語の切り方である。付録の方は似たり寄つたりと特色がある。付録の数は「辞典」は多いが「事典」の方は色が着いている。一方が官署の所

番地があれば片方は地図に示している。といつた具合である。とにかく付録にしても決して同じでないから二冊揃えてもダブルことはない。

監修者が同じでも決して同じ本でないから安心してよいであろう。しかし一冊しか買う余裕のない人は書評子にとられることなく, みずから較べられたい。(MN)

雪の祭典 高橋喜平著

B 6—230 頁, 1953 年 12 月, 明玄書房

"雪は私に生きる喜びを与えてくれ, その雪に私はほとんど半生をあてて自分の情熱を炎しつづけてきた。雪は私にとって総てであつた。"という著者が 19 年間折にふれ書いたり, 語つたりした随筆である。「雪と人生」に続く第二随筆集でもある。おさめる随筆 32 篇, 雪を思い, 雪を生活し, 豪雪を語り, 雪害に悲しむ一篇一篇まことに味わい深いものがある。著者と同じく雪国に子供の頃を過した評者にとつては 1 ページ 1 ページが「心の母」のように雪を語つてくれた。同じ著者のとられた写真を編集した岩波写真文庫「積雪」とならべ読まれるなら一層興を増すことであらう。とかく雪が「雪の結晶は美しい六花をなしている」という点だけ強く小・中学校で教えられている中であつて, 雪と人間の関係はもつともつと考えられなければならないものがある。近年水気象の必要からスノー・サーヴェーが各地で行われており貴重な資料が積まれているのはいろいろ問題があつてもとにかく喜ばしい事である。こういふ時に著者がなだれについて情熱的に書いているところは着目されてよからう。昭和 5 年の冬われわれの胸をいたく悲しめた「剣沢小屋の悲劇」はいつまでも忘れられないところである。なだれの中で綴られた遺書は若いアルピニストの死を前にしたきびしい言葉としていきいきとわれわれにせまつてくる。「父母ヨ サヨナラ 小屋ヲ改メヨ……死ヌノモ辛イモノナリ」, 「ア、残念ナリ モウ如何トモ出来ナイ 人間ノ力ハ弱イモノ……」という。その時から 24 年もたつているのにわが国のなだれの研究はどれだけ進められているだらうか。雪害対策にどれだけの手が打たれてきているだらうか。たしかにいくらかの進歩の跡は見られるであらう。かがやかしい雪に関する研究もいくつかなされたであらう。がもつともつと雪への関心, 雪と人間の研究へは情熱がそそがなければならないであらう。(伊東蘆自)

気象と生活 神山恵三著

A 5—170 頁, 180 円, 岩崎書店, 53 年 4 月

人間の生活と気象との関係はわれわれに身近かな問題であり, 経験的に理解しやすいということから, 取りあつかつたものが非常に多い。しかしこれらはいずれも断

片的に例をあげ、関係のありそうな気象と生活を単にらべて説明したものが多く、その相互関係を科学的に深くほり下げ、系統的にのべたものは少なかったのである。医学方面のものは生理学的説明が主になり、環境衛生学などにおいて気象がとりあつかわれても、医者の常識としての気象学概説程度のもので普通なのである。神山氏のこの書物は、とりあつかわれることが多いわりにかえつておそかにされ、本格的に調べられることの少なかったこの分野を気象学、医学、工学、社会学などの広い視野に立つて総合的に解説した独創的な所の多い書物である。そしてこのような多くの学問の境界にある問題は著者のごとき広い分野に通曉した人にして始めてまとめることができることなのである。

第1章 “気象と生活との関係についての根本的な考え方” においてはまずハンチントンの「気候と文明」と和辻氏の「風土」が著者の立場のアンチテーゼとしてあげられ批判されている。そして第3節において人間の生活状態に影響あるものとして自然環境、人口、生産力と生産関係があげられ、生活に及ぼす気象や気候の役割は自然環境の一要素として、生活状態の変化をもたらす決定的な原動力にはなりえないが、その発展を進ませたり、遅らせたりする原動力の一つであると考えられている。

説く所おおむね賛成なのであるが、神山氏の所説も一つの歴史的所産であるのだから、アンチテーゼばかり二つもならべずに、むしろ同じような両氏の批判は一節で我慢し、著者の立場の発展の歴史についても一節のべてほしかつた。神山氏の考えが提出される前までは、すべての考えがまちがっていたのではないのである。

第2章は気象の人体に及ぼすはたらきについて述べている。この章は著者のもつとも特意とするところであり、頁数も多くさかかっている。これほど人体と気象の関係を物理学的、生理学的に詳細に論述した衛生気象の解説書は少ないであろう。その中には著者の多くの研究がとり入れられており、独壇上であるだけに少しむづかしくなつて、聴衆が誰であるかをわすれているのではないかと思われる所もないではないが、しかしいくらむづかしくても、おちついて読めばこの章が一番面白いのである。

第3章 気象の調節は第2章にくらべて簡単で一通りの説明に終つているが、これは頁数の関係でやむをえない。今までの書物はおおむね第3章程度に終始していたのである。自然の改造についても書けば1冊の書物になりうるものであるが、もう少し書いてほしかつた。

神山氏はハンチントンと和辻氏の著書の成立についてその歴史的背景を分析しておられるが、神山氏の著書も同様に歴史的にその成立を分析してみると次のようになるのではないか。戦後に書かれた気象の解説書の多くは、出版業者からの要求に応じ、内職としてあまり勉強

もせずに、常識をはき出したものが多く、書き方の上手下手だけが問題であつた。ところが最近になつて若い世代のものが自分の専攻する学問はその学問に対する広い理解の上に新しい発展がうまれるという考えから、よく勉強して独創的な書物をまとめ始めたのである。このようなことはかつて学者であつたが、現在は学問の第一線から遠ざかっている人によつてはなしえないことなのである。今年はこの種の著書が2、3企画されていることをきき及んでいるが、神山氏の著書はそのさきがけをなすものであろう。(根本)

地球の起原 — 隕石理論の研究 —

ベ・ユ・レヴィン、ヴェ・エフ・ボンチ
コフスキー著 民主主義科学者協会、地
学団体研究会訳

文庫本文 112頁、解説 14頁、80円
54年1月 岩崎書店

本書は主としてソヴェットで発展した地球の起原についての隕石理論を平易に解説したものである。3章からなり、第1章地球と惑星の起原と第3章惑星と地球の構造はベ・ユ・レヴィンが書き、第2章地球の内部構造はヴェ・エフ・ボンチコフスキーが解説している。

現在までの学説の発展の歴史についてかなりの頁がさかれ、かんじんのソヴェットの理論はわりあい簡単にとりあつかわれているので、さらに立ち入った議論は第1章の末尾にあげられた文献を参照する必要がある。しかしこれらの文献が入手困難な現在では、かなり広く紹介されている米英流の理論に対してソヴェットの理論を知るのにかなり役立つであろう。

歴史的のとりあつかいにおいてもソヴェット偏重であり、また米、英、独などで発展している同種の理論についての記述はほとんどないので、全体の展望を期待して読まれるとあるいは失望されるかもしれないが、一つの断面と考えれば、参考になる点が多いのである。

現象の構造を知るばかりでなく、発展や進化の様相においてとらえることはきわめて大切なことである。最近基礎科学の発達にともなつて、後者の見方による現象のとりあつかいが、生物学や天文学の分野において目ざましい進歩を示し、地球の生成や海洋水の起原についても今までの古典的な考えは180度の廻転を示しつつある。気象に関連した問題でも、たとえばオゾン層の進化の問題はイギリスのバーナルが生命の起原の重要な要素としてとり上げているのである。

知識文庫は今まで社会科学の問題のみとり上げられていたが、この書物を最初として自然科学の問題もとりあつかわれるようになった。近く刊行が予定されているので気象に関連したものでは「極光」「天候と予報」がある。(N)